

南三陸ワイン誕生物語

東日本大震災で県内で唯一のワイナリーが流失，宮城県にもワイナリーを造ろうと2015年，仙台市秋保地区に秋保ワイナリーが設立された。

開業して間もないワイナリーがワイン用ブドウを入手するのは難しく，県内産のリンゴを使った「シードル」を醸造したが，その県産品種「サワールージュ」を栽培して秋保ワイナリーに提供したのが南三陸町の農家 阿部博之さんだ。

2016年，そのお礼として秋保ワイナリーから南三陸町へワイン用ブドウの苗木100本が寄贈された。その苗木が植樹され，将来的にわが町でもワイナリーを造ろうという機運が高まり，地域おこし協力隊を中心に2017年4月「南三陸ワインプロジェクト」がスタートした。同時に，独自に苗木700本が植樹され，醸造家を育成するため秋保ワイナリーへの派遣研修も開始した。



その結果，町内に本格的なワイナリーを造るため，2019年2月，地域おこし協力隊2名が「南三陸ワイナリー株式会社」を立ち上げ，南三陸ワインが販売された。さらに，日本ワインコンクール2019に出品し宮城県では初の奨励賞を受賞した。

今年は南三陸町産ブドウの初収穫を迎える予定で，町内産ブドウを使った初のワイン醸造所の計画が進められている。春にはさらにブドウ畑を拡大し，近い将来「海に見えるワイナリー」の開設を目指している。

【記事提供：南三陸町農業委員会】